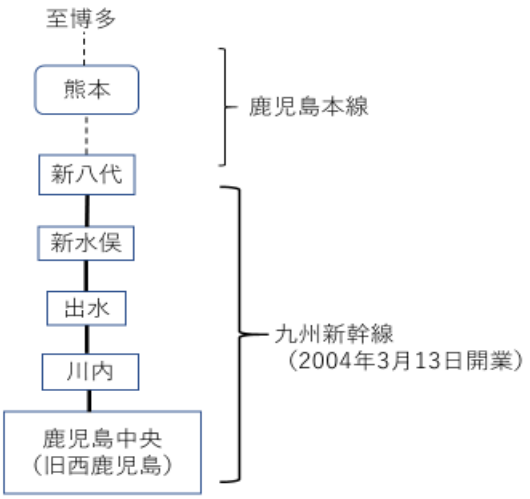
旅する女

南風　こまち

→図①

鹿児島本線・九州新幹線　路線図（2004年ダイヤ改正時点）



鹿児島本線特急停車駅

＊2004年3月12日をもって博多～西鹿児島（現鹿児島中央）間を結ぶ昼行特急は新八代止まりに運行区間が短縮された。

九州新幹線停車駅
（旧鹿児島本線特急列車停車駅）

＊2004年3月13日ダイヤ改正で九州新幹線新八代～鹿児島中央間が開業した。同日付で西鹿児島駅は鹿児島中央駅に改称した。

〈謝辞〉
本作中で使用する交通新聞社『九州・中国版小型時刻表２００３年７月号』は、三文文士会所属、葉桜照月先生より提供して頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。
また、本作の執筆にあたって三文文士会所属、芋粥露青先生の助言を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

２０２０年７月６日　南風　こまち

〈補足・注意事項〉
＊九州新幹線は２０１１年３月１２日に博多まで全線開業し、特急『なは』『リレーつばめ』は廃止されました。
＊本作品に掲載した全ての図において、無断転載を固く禁じます。

〈前回までのあらすじ〉
互いに惹かれ合っていく碓氷と剱。深夜の色街に繰り出した二人は、徐々に心と体を開き、重ねていこうとする。しかし、碓氷の過去が二人の仲を少しずつ揺るがしていく。二人はそれを知らない。

少しへたったベッドに腰掛けていると、礼士さんがシャワールームから出てきて隣に座った。私は強張った手で自分のバスローブの裾を握りしめた。
「あの……」
私はか細く、少し震えた声で礼士さんに呼び掛けた。
「瑞穂さん……怖い？」
私は礼士さんの穏やかな言葉に逡巡し、そっと首を横に振った。僅かに湿り気を残した黒髪が揺れる。
「大丈夫……ちょっと緊張して」
この先は知っている。ひたすら恥ずかしさと激痛に耐えればいいだけのことだ。嵐は待てば、必ず過ぎ去る。
「……強いんだね」
強いんじゃない。そんなんじゃない。
「じゃあ……いい？」
礼士さんはあくまでも穏やかであまり興奮の色を見せない。それはそれで安心するが、少し寂しくもあった。私に過去があるように、この人にも過去があるのだろう。
恋人の大きな手が私の頬に触れ、そっとこすれる。そのまま私は彼の大きな体に抱き寄せられた。優しく、でもしっかりと抱きしめられる。二着のバスローブ越しに、お互いの肌のぬくもりが心地よく溶け合う。
「礼士さんは……私みたいな女でいいの？」
「瑞穂さんじゃないと絶対に嫌だよ」
耳元で囁かれる。思わず鳥肌が立った。私はたまらずに、礼士さんの太い肩にしがみついた。
「……いい匂い」
私のショートヘアが恋人の鼻先をくすぐる。
「え……そ、そう？」
「うん……瑞穂さん」
もう逃げられない。
「……来て。礼士さん」
礼士さんは私と唇を重ね、舌を絡ませ合う。穏やかで優しいのだが、ねっとりとしつこいキス。うっすらとお酒の匂い。唇を離すとその匂いも消えた。
「……何だか、ドキドキするね」
礼士さんは私の黒髪を優しく撫でて、少し照れたように目を逸らした。私の頬もつられて赤みが差す。でも、興奮というよりは、不安で鼓動が速くなる。
「……じゃあ、脱がすよ？」
「……うん」
礼士さんはおずおずと、私のバスローブの結び目に手をかけた。きれいに爪を切り揃えた手が少し震えて、解くのに時間を要した。
「礼士さんも……緊張してるの？」
「まあね……」
礼士さんは少し苦笑いし、腰紐を解く。そのままゆっくりと私のバスローブを剥いた。頬が熱くなる。
「……瑞穂さん。その、これって……？」
礼士さんの当惑の声に、私は内心で落胆した。
だから聞いたのよ。私みたいな女でいいのかって。
薄暗く甘ったるい色をした電球の真下。傷だらけの私の素裸は痛々しい姿を礼士さんに晒していた。
私は静かに目を閉じて、礼士さんの次のアクションを待った。押し倒されるか、それとも萎えて関係ごと終わりになるか。急速に頬の熱が冷めていった。
どっちでもなかった。
「どこで……どうして、こんな……」
礼士さんの悲しそうな声。私は目を開けた。
「痛かっただろう？　何だよこれ……何があったんだい、これは……何が……？」
「……」
あまりにも予想外のリアクションだ。ぽかんとして、返事ができなかった。
「いやあの、その、別に話したくないなら、黙っていてもいいんだよ……？」
どうやら私の沈黙を不機嫌と勘違いしたようだ。私は自分の裸体を見下ろした。薄い胸から細い腹、太腿にかけて、火傷、切り傷、古痣……体のあちこちに古傷が、星のように散らばっている。ほぼ全て服の下に隠れる位置にあることが、人為的なものだと暗示している。
「酷い……」
礼士さんの声の調子が変わった。鼻声だ。
私は目の前にいる男……いや、恋人のことが信じられなかった。
心のどこかで私は諦めていたのだろう。私は独り。その諦めが、礼士さんの鼻声で少しずつひび割れていく。
「……何でよ」
なのに、私の口からこぼれた言葉は、自分でもびっくりするほど刺々しかった。
「何で礼士さんが泣いているのよ」
礼士さんの少し潤んだ垂れ目が私を見る。その石炭のような明るく黒い瞳には、しっかりと傷だらけの私が映りこんでいる。
「何でって……そりゃ悲しいからだよ。大好きな人がこんな目に遭って、何も悲しまない方がどうかしてるよ！」
礼士さんがさらりと言ってのけた言葉に、冷めていた私の頬が燃え上がった。

「だっ、大好きって……え……あっ……」
私の心が嬉しさに目覚めるよりも、礼士さんが私を抱きしめる方が早かった。
「こんなのってないよ……あんまりだ……！」
礼士さんが私の悲しみを肩代わりすればするほど、私は冷静になっていった。
「礼士さん」
私は恋人の名前を呼ぶ。さっきまでの刺々しさは無い。
「話を聞いてくれない？」
賭けてみよう。この人の優しさに。
「瑞穂さん……その話、長い？」
賭ける？　いや、信じてみる。
「え……そうね。少し長い話」
この人なら。この人だけは。
「じゃあ……」
礼士さんは何を思ったか、抱き寄せた私の体を離した。
「あ……」
私は少し不満げな声を漏らす。礼士さんは少し不器用な手つきで私にバスローブを着せて、また抱き寄せた。
「裸のままで、風邪をひいたらシャレにならないだろ？」
……。
「ゆっくりでいい。話してくれるのなら、聞くよ」
礼士さんの声の調子が、いつもの優しく穏やかなものに戻った。
私は礼士さんの厚い胸板に顔と体をもたれさせ、記憶の糸を辿り始める。
「あれは２００４年の……いつだったっけ……」
話は９年前に遡る。この人に出会うより、ずっと前に。

＊　＊　＊

『おはようございます。３月１２日、朝のニュースです……』
僕は欠伸をして何の気なしにテレビをつけた。九州地方版のローカルニュースをやっている。
瑞穂は先に起きて、既に朝食を済ませていた。もう出かける準備をしている。
「おはよう、お父さん」
「ああ……」
瑞穂は部屋の隅に荷物を置く。台所から僕のぶんの味噌汁をよそってきた。今日の具はなめこだ。
『開業を明日に控えた九州新幹線。沿線はお祭りムード一色で、歓迎の準備を進めています……』
少し古ぼけてきたブラウン管テレビに、真新しい新幹線の映像が映る。
「お父さん、私、もう出るから」
瑞穂は荷物が詰まったトランクを手に玄関に向かう。
「線香は？　数珠は？」
ここ、出水……鹿児島の片田舎から高知まで行くとなれば泊まりがけになる。
「ちゃんと持った。……行ってくるね」
僕の意見など無いも同然で、玄関を開ける音がした。
「おばあさんによろしくな。気を付けて」
気が急くのは仕方ないだろう。だらしのない父親の言葉などどうせ耳を貸さないだろうし、これ以上は止めないでおく。戸が閉まる音がした。
実里が死んで一年になる。結局、僕は不甲斐ない夫であり、父親でしかなかった。実里の実家からは、彼女の葬式を終えてから縁を切られてしまった。それだけに、実の娘でない瑞穂が法事に出向くのは意外だった。
『仕方ないやろ、子は親を選べんがやき』
生粋の高知の女だった実里の言葉は、今も僕の胸に棘のように刺さっている。高知の女は『はちきん』と言って男勝りで勝気なはずだが、よく捨てられなかったものだ。
もそもそと粗末な朝食を終え、食器を流しに下げる。店の準備をしなければ。
僕の仕事場はしがない洋裁店だ。建物の一階が店舗、二階が住居になっている。僕と瑞穂の二人で切り盛りしているが、今日からしばらくは瑞穂がいないから一人だ。基本的に休みは無いが、店を開けたところで閑古鳥が鳴くだけだ。
９時。店を開ける。

＊　＊

今日もろくに客が来ない。やることもなく、のろのろとショーウィンドウのガラスを拭くくらいだ。ゆくゆくは瑞穂に店を任せるつもりだが、このままでは自分の代で終わりかもしれない。
黄ばんだショーウィンドウから新幹線の高架が見える。ニュースではお祭りムード一色とか言っていたが、この店はそれどころではない。経営が思わしくないのだ。観光名所とか観光客受けのする商品を扱う店なら新幹線への期待も大きいだろうが、こんなしがない洋裁店にはそんなもの望むべくもない。経営難の突破口が開けないのがキツい。
店に一本の電話がかかってきたのは昼過ぎのことだった。衣服の出張修理の依頼だろうかと思って電話の番号を見ると、一番ありがたくない相手からだった。渋々電話に出ると、おちゃらけた声が聞こえてきた。
『あ、兄貴？　俺だよ』
「輝……店の電話にかけるなってあれほど言っただろ。

また金か？」
厄介な弟だ。今に始まったことではない。
「いつまでものんべんだらりとしてないで、いい加減に安定した仕事口を見つけたらどうだ」
『だらしなさについては兄貴に説教されたくないね。会津さんのこともあっただろ？』
過去の不倫という痛いところを突いてくる。輝はケラケラと笑った。
『ま、そんなわけだからさ、今月もちょっとヤバいんだよ。頼むよ、兄貴』
「……輝、話がある。今夜そっちに行ってもいいか？」
『え？　いいけど、ろくにもてなしもできないぜ？　それに瑞穂ちゃんはどうするんだよ？』
「瑞穂は高知だ。今朝発った」
どっちにしろ、瑞穂を下手に近付けたくない相手だ。輝の色狂いは今に始まったことではない。女絡みで今までにも何度も金の無心に来ている。血を分けた兄弟をこうやって呼ぶのは気が引けるが、ろくでなしだ。
『はーん……そうかい。ま、いいぜ。夜になるんだろ？』
「ああ」
そこから二言三言話して電話を終えた。こっちも金銭的にヤバいのだ。今日こそはしっかりと灸を据えてやらねばなるまい。
輝は熊本駅の近所に住んでいる。店を閉めるのは5時だから、着くのは夜の7時頃だろう。

＊　＊

いつも通り店を5時に閉め、少ししてから出水駅に向かう。道中暇潰しに読む本と時刻表は仕事用の鞄に放り込んだ。あちこちに貼られている新幹線開業のポスターを横目に、券売機で切符を買う。
『17時42分発、特急つばめ22号、博多行きが参ります……』
金欠だから自由席だ。夕方のためなのか混んでいるが、うまい具合に空席を陣取って暇潰しの本を開く。鮎川哲也……知らない作家だが、瑞穂の本棚から拝借したものだ。ぺらぺらっとページをめくると短編集のようだ。
本はミステリだった。犯人目線で書いたアリバイ物……ってやつか？　あまりこの手の本は読んだことが無いため、少し読みにくかった。時刻表もちまちま読んでいたら乗り物酔いしてしまった。瑞穂がこんなものを読んでいるとは全然知らなかった。
熊本駅に着いて、そこから徒歩5分くらい。輝は木造のボロアパートに一人暮らしだ。錆び付いたインターホンを鳴らすとのそのそと弟が出てきた。
「あぁ、兄貴か……まあ入りなよ」
輝は雑に染めた金髪をかきあげながら僕を案内した。居間に通されて、こたつに足を入れる。
「冷凍物でいいか？　ってかそれしかねえけど。さっき買ってきたんだ」
輝はけらけらと笑って冷蔵庫に向かう。数分後、僕と弟の前には湯気を立てるチャーハンがあった。
「このアパート、他の住民は？」
「さあ？　いるにはいるだろうけどさ、夜勤が多いみたいでこの時間はカラッポだぜ」
輝は缶ビールを呷る。
「兄貴もビール飲む？」
僕は頷いた。コップにビールを注いでもらい、一口飲んでから本題に入る。
「で？　また金か」
「仕事が無くてね」
ヘラヘラと笑う輝に僕は段々苛々してきていた。
「仕事が無いって、お前……建設の方は？」
「大型プロジェクトが一段落しちゃってな。今は暇してんのさ」
「大型プロジェクト？　何を建てていたんだ？」
「新幹線さ」
「新幹線？　……ああ、あれか」
今朝のニュースでやっていた奴だ。
「今度からここに来るときは新幹線だな、兄貴」
「そんな日は来ないよ」
「何だよ、冷たいな」
僕はスプーンを皿に置いて輝を睨んだ。
「輝、今度は何に使った？　酒か？　パチンコか？」
弟はめんどくさそうに目を逸らす。
「輝も知ってるかどうかは知らないが、こっちだってピーピーなんだ」
「ふん、あんなシケた店なんていつまでもだらだらとやってるからだろ」
輝はズボンのポケットから煙草とマッチを取り出した。ソープランドの安マッチだ。薄汚い部屋に紫煙が漂う。
「また女かよ……」
「どの口が言うんだよ。女で失敗して子供まで作った兄貴には言われたくないね」
僕は腹が立った。無視して本題に入る。
「真面目に聞け。お前に貸す金は無いって、今夜は言いに来たんだ」
「へっ、そんなわけあるかよ。瑞穂ちゃんを働かせたらいいだろ。高校を辞めさせたら学費も浮く」
「彼女はうちの店で働くんだ」
「へー！　あの閑古鳥も寄り付かないような店でかよ！

あっははは、こりゃ傑作だ」
輝は灰皿に灰を落とす。
「瑞穂ちゃんを他で働かせたらいいだろ、え？　あれは化粧で化けたらモノになるぜ。オッパイが小さいのが残念だけどな」
「いい加減にしろ！」
僕はカンカンになってこたつを叩いた。
「お前はいつもいつもそうだ。大体な……」
「へーへー、まーた説教かよ。俺が欲しいのは説教じゃなくて金なんだよ、カ、ネ。大体な……」
輝は僕の口調を真似し、火に油を注ぐ。
「説教するならまずちゃんと話を聞いてからにしてもらいたいもんだな。俺は今回は無駄遣いはしていない。部屋に女を呼んだら金を持ち逃げされたんだ」
「女を連れ込んだ？　デリヘルか。あのなぁ、そういうのを無駄遣いって言うんだよ」
「俺の女遊びについては兄貴がどうこう言える資格はないぜ？　瑞穂ちゃんだって兄貴の浮気相手が産んだんだろ？　そんなの兄貴も実里さんもよく引き受けたな。俺みたいに後腐れの無い女を選ばないから、そんなことになるんだよ。店で働かせるって、あんなジリ貧な店に未来があるって本気で思ってんの？」
「……何だと？」
図星だった。
「大体、兄貴も瑞穂ちゃんのせいで実里さんと上手く行かなかったんだろ？　結局死に別れたけどさ。そんなお荷物女なんて風俗にでもソープにでも売っちゃえよ。金になるし。何なら俺が買ってヤろうか？　あ、まずは金を貸してもらわないとどうにもなんないな、はは」
へらへらと笑うろくでなしを前に、頭の中で何かが弾けた。
「……ふざけんなよこのごくつぶし！」
そこまでだった。僕はこたつを倒し、輝に馬乗りになって殴り始めた。頭の中で血がぐらぐらと沸騰する。
「……っつ、やりやがったなてめえ！」
輝は建設現場で肉体労働に従事しているだけあって、僕より腕力が上だった。馬乗りになったはずなのにいつの間にか僕が下になっている。そのまま輝は僕の首に手をかけようとしてきた。
「いつもいつもえらそーに、ムカつくんだよ！」
このままでは殺される！　僕は必死に首を避け、輝の手に噛み付いた。ひるんだ隙に足で急所を蹴り上げる。輝は股ぐらを押さえて悶絶し、僕の横に転がった。今だ、今のうちにとどめをさそう！　何かないのか！？
「この野郎……ぶっ殺してやる……っ！」
弟の殺意に急かされ、僕は周りを見回す。目に留まったのはこたつのコードだった。とぐろを巻いた蛇のように差し込み口からの距離に余裕があるそれを引っ掴む。弟が起き上がる前に首に巻きつけ、渾身の力を込めて引っ張る。
「うあっ……あっ……がはっ……！」
輝がコードを解こうともがくが、馬乗りになってそれを押しとどめる。
「やめ……っつ……！！」
掌がじっとりと汗ばみ、コードがずるずると滑る。しっかりと握り直し、引っ張る腕に力を込める。
「ぁ……ぉ……」
輝の肌が段々と青くなっていく。もがく動きが少しずつ鈍く、弱々しくなってきた。
「……！！」
コードを引っ張る手は緩めない。いや、緩められない。恐怖で手が強張って制御できない。でも緩めたら逆に殺されてしまう。ここで踏ん張らねば。踏ん張る。
「……」
ふっ、と輝の体が脱力する。……もう、大丈夫か？
「……はあっ、はぁ……はぁ……」
コードから手を離す。僕の荒い呼吸の中に、どさりと何かが床に崩れ落ちる音。
死んだ輝の音だった。

＊　　＊

何だかにわかには信じられなかった。輝が死んだなんて。僕が輝を殺したなんて。
僕は完全に気が動転していた。鼓動が止まり、冷えていく輝の死体と対を成すかのように僕の体はかっと熱く、心臓はバクバクと脈打っていた。
「け……警察を……」
警察？
……だめだ。そんなことしたら……。僕は刑務所での暮らしを想像し、悪寒を覚えた。
とにかくこのままでは輝の死体が見つかるのは時間の問題だ。どうにかして処理しないといけないが、そんな魔法のような方法がすぐに思いつくわけも無かった。なすすべも無く時計を見ると、１９時２０分くらいだ。
そうだ、輝の死体が見つかっても僕が犯人だとばれなければいいんじゃないか？　さっき読んだ短編集を思い出す。あれに何かヒントがあるかもしれないが、一から読み返しているなんて悠長なことはしていられない。でもそんなことせずとも、僕の頭にある考えが浮かんだ。
アリバイを作ったらどうだろう？　確かさっきの本の中に、死体を暖めて死亡推定時刻を偽造するトリックが

あったはずだ。輝の死体はここに放っておいて、死亡推定時刻をずらして、その時間に自分は店番でもしていればいい。そうだ、そうしよう。

でも、そんなに都合よく時刻表トリックを組めるだろうか？　こんな片田舎のローカル線、列車の本数もたかが知れているから大丈夫だとは思うが……しかし。

不安だ。不安じゃないわけがない。死亡推定時刻を遅らせても、自分がその時間に熊本まで往復できることが判明したらアウトだ。アリバイ工作にならない。一縷の望みを託し、時刻表を鞄から取り出す。九州地方くらいしか載っていない小型の時刻表、しかも去年の７月のものだ。家にこんなものしか無かった。

輝の死亡推定時刻がいつだと判明するのかは分からないが、あれだけ部屋を暖めたら半日の後ろ倒しは確実だろう。明日朝の７時ってところか。さっき読んだ小説でもそんなことを言っていた気がする。あの話はエアコンのみを使っていたが、正直なところそれだけでは心もとないそう思う僕の目に留まったのはこたつ。これも併用しよう。さっきのミステリ小説よりも厳重に死体を暖めることになるから、半日くらい死亡推定時刻を後ろ倒しにできるだろう。祈るしかない。

輝を殺したのが夜の７時過ぎ。僕が出水から熊本に朝の７時に行くことはできるのか？　調べるとこうなった（図②参照）。

出水から始発列車に乗った場合だ。これはまずい。７時台に出水から熊本に行けてしまった。でも待て、僕ははやる心にブレーキをかける。明日はいつも通り朝９時に店を開ける。つまりそれまでには熊本から出水に戻っていないといけないはずだ。できるか？　また調べる（図③参照）。

→図②

出水→熊本

普通２４２０Ｍ	出水	５：３４発
	八代	６：４８着
↓		
特急『有明６号』	八代	６：５７発
	熊本	７：１９着

（出典：交通新聞社『九州・中国版小型時刻表２００３年７月号』）

→図③

熊本→出水

寝台特急『なは』	熊本	７：１４発
	出水	８：４７着

＊特急『有明６号』が熊本７：１９着のため時間的に使用不可能。

特急『つばめ１号』	熊本	８：２０発
	出水	９：３２着

＊ウスイ洋裁店（出水）開店時刻の９：００に間に合わない。

（出典：交通新聞社『九州・中国版小型時刻表２００３年７月号』）

寝台特急『なは』を見つけた時はぎくりとしたが、出水から始発に乗って熊本に行ったところでまず乗れない。ましてや輝を殺害する時間など皆無だ。じゃあその一本後の列車は？　これなら熊本で輝を殺害する時間は取れるが、今度は出水に引き返して朝９時に店を開けることができない。つまり、明日朝にいつも通り店を開けたら……。

アリバイ成立だ。

これなら何とかなるだろう。始発を乗り継いで熊本まで往復しても犯行が不可能なら、それより後の時間帯でも同じこと。輝の死亡推定時刻を半日以上後ろ倒しできたら勝ちだ。

そうと判ればさっさと事を済ませよう。指紋が付かないように台所のゴム手袋を拝借する。

「リモコンは……あった」

エアコンの設定温度を限界まで上げて、こたつを元の位置に戻す。カーペットの無い床とこたつの脚がこすれ合って嫌な音がした。死体をこたつに引き摺り込む。

「……」

輝の生気の無い目に僕の姿が映り込む。もう手を出すことは無いし、何も怖がる必要は無い。でも、ぞっとしたから瞼を閉めてあげた。偽装工作を再開する。

全身をこたつに突っ込みたかったが、迷った挙句やめた。こたつに肩まで入った状態で馬乗りになり、首を絞めて殺すなんてできないはずだ。それなのに死体が肩辺りまでこたつに入っていたら犯人が死亡推定時刻をずらそうとしたことが警察にばれてしまう。腹が隠れる辺りまでこたつに放り込んでおいた。

遺体の細工は……こんなもんでいいか？　さっきの小説よりも厳重に死体を暖めているから、半日くらい死亡推定時刻をずらせるだろう。祈るしかない。

僕がここにいた痕跡も消さないといけない。床に散らばった僕のチャーハンの残りを掃除し、台所にあったコンビニのビニール袋に詰める。自分の食べかけのチャーハンから唾液か何か、僕に繋がる手がかりが見つかったら困る。持って帰って捨てよう。床にこぼれたビールはどうしようか迷ったが、これも全部拭くことにした。僕の飲みかけと輝の飲みかけが混ざってしまったからだ。ビールの空き缶はそのまま放っておいた。僕は一切手を触れていないから、何の証拠にもならない。

次は食器だが、弟の食器は床に転がっていた。割れてはいないし、このまま放っておこう。輝のぶんと思われるチャーハンの残りはそのまま残しておく。こたつの上に残っていた僕が使った食器だけを丁寧に洗い、水気を拭い、元あった場所に片付ける。

気が付くと部屋は温室のようにぽかぽかになり、やがてそれを通り越して暑くなってきた。ここまで部屋を暖めて放置したら死亡推定時刻も後ろ倒しにできるだろう。

そうだ、部屋も荒らしておこう。警察も強盗に入ったと考えて自分にはあまり注目しないかもしれない。元から散らかっている部屋だがさらに散らかしまくる。金目の物を丹念に自分の鞄にしまうが、金欠と言うだけあって大したものはなかった。

偽造工作はこんなものだろうか。いや待て、電話の履歴を消しておこう。僕に電話をかけたことがばれたら疑われてしまう。後で店の電話の履歴も消そう。僕は電話に近寄り、履歴消去の操作をした。

後は？　ああ、そうだ。さっき輝の手に噛み付いたな。あのまま自分の唾液が残っているのはまずい。ＤＮＡ鑑定なんてされたら自分の犯行が丸わかりだ。石鹸水で濡らしたティシュで噛み付いた手を丹念に拭った。石鹸が残らないように水拭きも忘れない。死体に触るなんて気持ち悪いが、こればかりは仕方ない。

後はエアコンの温度も普通より少し高めくらいにしておく。部屋を出て鍵にこじ開けた跡をつける。針金なんてものはないからどうしようかと思ったが、衣服の出張修理で使う縫い針をうまい具合に持っていた。これを鍵穴に無理矢理突っ込む。空き巣が輝と鉢合わせして殺してしまった、というシナリオもこれで完成だ。

僕は何もしていない。何もしていないんだ。ちょっと飲みすぎて、悪酔いして変な夢を見ただけだ。そう言い聞かせつつ、足早に駅に戻る。

熊本駅に着き、帰りの特急を待つ。ホームは結構な数の人がいたが、どういうわけかみんなオタクっぽく、カメラやら何やらを抱えてうろちょろしている。何か珍しい列車でも来るのかどうか知らないが、気持ち悪かった。というか僕まで写真に写りこんではたまらない。乗る列車が来るまでトイレの個室に身を潜めた。

『特急つばめ２５号、西鹿児島行きが参ります。お下がり下さい……』

アナウンスに呼ばれてホームに戻り、素早く乗り込む。席に座るとどっと疲れが噴き出した。

「……ふぅ……」

小さくため息をつく。熊本駅を出た列車は段々と速度を上げ、車窓は闇に閉ざされた。

＊　　＊

翌朝。僕は目を覚ますとすぐに起き上がった。昨夜は偽装工作に使った縫い針や、持ち帰ったチャーハンを処分したり、持ち帰った金品を仕分けたり、何よりも弟を殺してしまった興奮で寝るどころではなかった。結局寝

ついたのは4時頃で寝覚めは最悪だった。テレビをつけ、朝食の用意をする。輝が殺害されたニュースが出ているだろうかと身構えたが、くすんだ画面に映し出されたのは予想外のものだった。

『今日、九州新幹線の新八代駅～鹿児島中央駅間が開業しました。この区間は新幹線『つばめ』が最速35分で結び、南九州地域の活性化につながると期待されています。鹿児島中央駅では開業を祝う出発式が開かれました』

映像が切り替わると、ホームでテープカットをする人々の姿が映し出された。くす玉が割られ、真新しいピカピカの新幹線が警笛を鳴らして発車する。

輝が作った新幹線ってこれのことだよな……。

結局、輝が殺害されたニュースは流れなかった。

朝9時。店を開ける。これでアリバイは成立だ。

＊　＊

『こんにちは。正午のニュースです。今朝、熊本市内のアパートから男性の遺体が発見されました。遺体で発見されたのは市内の建設会社に勤務する碓氷輝さん、40歳です……』

午前中に少しばかりの客の相手をした後、お昼休み。テレビをつけた僕は白たくあんを落としそうになった。もうばれたのか。テレビを食い入るように見つめると、昨夜尋ねた木造のボロアパートが映し出された。警官がうろつき、黄色い規制線のテープが風に揺れている。

『警察は、部屋の鍵がこじ開けられたことや室内が荒らされていたことから、空き巣による犯行とみて捜査を進めています……』

警察は空き巣の犯行だと思っている？　じゃあまだ僕のことには気づいていないってことか。兄である自分に聞き込みにくらいは来るだろうが、この風向きのまま進めば大丈夫だ。それに僕にはアリバイがある。落ち着け。大丈夫だ。

瑞穂がいなくて良かった。彼女が家にいたら自分が昨夜外出していたことや、輝から電話がかかってきたこともばれてしまう。それに、今このように動揺している自分を見て不審に思うだろう。

そういえば、輝を殺したことによる思わぬ副産物があった。これは輝の部屋から持ち帰った金目の物を仕分けしていた時に思い至ったものだ。遺産だ。輝に一番近い血縁者は僕と瑞穂だ。あの輝が厳重に遺産を管理するわけもないだろうし、僕と瑞穂が遺産配分でも一番取り分が多くなるだろう。この遺産が借金とかだったら相続放棄をしなければならないが、そうでなければ幾許かのお金が入ってくる。あの輝のことだから大した遺産はないだろうが、傾いた店の経営の足しにすることもできるかもしれない。

内心しめしめと思いながら迎えた午後。警察が店を訪ねてきた。初対面なのに押しが強い男だった。

「碓氷新平さんですね？　鹿児島県警捜査一課警部の黒松といいます。こちらは部下の八雲です。あなたの弟さんが殺害された件について、少々お時間を頂きます」

遺族への聞き込みの一環だろう。瑞穂がいないため誰かに店番を代わってもらうこともできず、かといってこのまま開いていても閑古鳥さえ寄り付かない。仕方ないからいつもより早めに店を閉めて二階の居間に通した。黒松警部が窓の奥に映る新幹線の高架に目をやる。新しい物好きなのかもしれない。八雲刑事が話を始めた。太い女だ。

「既にご存じのことと思いますが……あなたの弟、碓氷輝さんが今朝、熊本市内のアパートの一室から絞殺死体になって発見されました。熊本県警さんが主体になって捜査をしていますが、親族のあなたと碓氷瑞穂さんがこちらの方にいるとのことで聞き込みに伺いました」

「そうですか……とりあえずお茶でもどうぞ」

僕は番茶を出した。黒松警部と八雲刑事は、それぞれ好対照な大きさの体で無愛想に一礼した。警部の吊り目が僕を見る。

「警察は当初、弟さんの殺害を空き巣の仕業と考えました。鍵穴にこじ開けたような跡が見られることや、部屋が荒らされて金品が奪われていたことなどが理由です。ですが、現在はこれらの痕跡は犯人による偽装工作ではないかと考えています」

「えっ……そうですか。テレビで聞いた話と違ったので少し驚きました」

内心、僕は少しうろたえる。黒松警部は探るように眼鏡越しに僕の目を見た。

「理由はいくつかあります。空き巣の仕業と考えるには矛盾点が見受けられるんです。空き巣はそもそも、人がいない家を狙うものです。碓氷輝氏の死亡推定時刻、あのアパートには複数の空室がありました。碓氷輝氏が在室のところにだけピンポイントでわざわざ押し入る理由がありません」

「単に気付かなかっただけではないんですか？　弟がいることに」

「弟さんは部屋の電気を消したままチャーハンを食べていたとでも言うんですか？」

「……そんなことはないでしょうね」

警部の冷たい反論に僕は内心渋々と、でも見た目にはさらりと同意し、再反論を試みる。

「空き巣という前提が間違っているんじゃないんです

か？　強盗なら弟がいようといまいと押し入るかもじれません」
「仮に強盗の仕業だとしても、わざわざ人がいる部屋だけを狙い撃ちにして押し入るのは不自然です。ピッキングなんてせずにドアを破ったり、家主を呼び出して身動きを取れないようにすればいいんですから。それに先程も言いましたが、碓氷輝氏の死亡推定時刻には無人の部屋が複数ありました。無人の部屋の方が盗みに入るにはローリスクです」
　昨夜、輝は殺される前に『この時間帯はアパートは無人だ』みたいなことを言っていたような気がする。ずらされた死亡推定時刻でも無人の部屋があったのか、しまった。……そういえば、輝の死亡推定時刻はいつくらいなんだろうか？　それが僕のアリバイの成否を決めるというのに、不思議な程に無自覚だった。
「このような理由から、警察は部屋が荒らされたのは犯人による偽装工作だと考えています。では、碓氷輝氏を殺害したのは誰なのか？　……兄のあなたなら弟さんも警戒せずに部屋に招き入れるでしょうね？」
　僕は警部の次の言葉に生唾を飲み込んだ。
「碓氷新平さん、あなたはこのウスイ洋裁店を経営していますが、この店の経営は芳しくないようですね。あなた、弟さんの遺産を目当てに殺害したのではありませんか？」
　僕は内心で冷や汗をかきながら首を横に振る。
「僕は何もしていません。何も知りません」
「んー……そうですか」
　黒松警部は少し考えこむ表情をして番茶を啜った。険しく縦皺を眉根に寄せている、嫌な表情だ。
「あの……弟は何時くらいに殺されたんですか？」
　僕ははやる気持ちを抑えてそっと尋ねる。
「今朝の7時から8時の間と考えられています」
　今度は内心ガッツポーズ。部屋を暖めた甲斐があった。自分は輝の死亡推定時刻に犯行現場の熊本まで往復できない。もう大丈夫だ。
「そんな朝の時間帯を空き巣や強盗が狙うとはなおさら考えにくいんですよ。碓氷新平さん、今朝はその時間帯にどこで何をしていましたか？」
　僕は嫌味を言って時間を稼ぐ。いくらアリバイがあるとはいえ、下手に言うとぼろを出しかねない。
「アリバイ調べですか。あまり気持ちのいいものではありませんね」
「仕事でしてね」
　警部はつまらなさそうに返す。しかし僕を見る目は鋭い。僕は声を落ち着けて言った。
「そのアリバイですが、一人でここにいましたよ？　朝食を済ませて、いつもの時間に店を開いて」
「いつもの時間と言うと、朝の何時ですか？」
「9時です。今日もその時間に店を開けました。お客さんもいたので聞けば分かるはずです」
　これで警察も引き下がるだろう。
「じゃあ、その前の時間帯は誰もあなたのアリバイを証言できないんですね？」
　あれ？　こいつら、思いの外しつこい。押し殺していた不安がむくむくと頭をもたげてきた。
「まぁ、そうなりますね。今は瑞穂がおらず一人なので」
「瑞穂……娘さんですか。今、どちらに？」
「高知にいます。母の墓参で」
　黒松警部はメモを取る。
「車の運転はされますか？　ここから熊本の現場まで、車なら片道2時間くらいで着きますが」
　八雲警部が放った質問は予想外だった。でも、昨夜は車に手を触れていない。問題外だ。
「ええ、することもあります。ですが昨夜は運転しませんでした。カーナビを調べてもらえば分かるでしょう。仮に熊本の輝の所に行ったとしたら、昨夜のＧＰＳ履歴が残っているはずなので」
　電車も駄目、車も駄目。これなら警察も諦めるだろう。
「そうですか……しかし碓氷新平さん、あなたには今回の事件に関して確たるアリバイは無さそうですね」
　……。
「……あの、今何て？」
「あなたにはアリバイが無い、そう言ったんです」
「ふぁっ！？」
　八雲刑事が繰り返す。僕は思わず変な声が出た。そんな馬鹿な。昨日ちゃんと調べたはずだ。ここからの移動時間的に輝の殺害は不可能だ。僕にはアリバイがある。
「……どういう意味ですか？」
　黒松警部は窓の外を見て、指差す。
「あれですよ」
　僕は窓の外を見た。今朝開業したばかりの新幹線が勢いよく高架を駆け抜けて行く。
「……新幹線がどうかしたん、ですか……？」
　僕の声は段々か細くなっていった。
　新幹線って……特急よりも速いよな……？
「あれを使えば、あなたはここから熊本に行って碓氷輝氏を殺害し、そこから引き返して朝9時に店を開くことが可能です」
　黒松警部は鞄から時刻表を取り出して僕に見せた（図④参照）。

→図④

出水・熊本間（2004/3/13）

新幹線『つばめ３０号』　　出水６：２５発　新八代６：４６着
↓
特急『リレーつばめ３０号』　新八代６：４９発　　熊本７：１４着

特急『リレーつばめ３３号』　　熊本７：５３発　新八代８：１５着
↓
新幹線『つばめ３３号』　　新八代８：１８発　　出水８：４０着

（出典：交通新聞社『ＪＲ時刻表２００４年１０月号』）
＊作者注：この時刻は定期列車のもので、３月１３日時点から変更はありません。

「熊本駅から碓氷輝氏のアパートへは徒歩数分、仮にあなたが犯人だとした場合には弟さんを殺害し、偽装工作をする時間はあります。死亡推定時刻にも一致しますしね。また、この店は出水駅から徒歩数分の好立地です。これなら朝9時に店を開けることも可能です。なお、ここに挙げた列車は今朝全て定刻通りに運行されました」

黒松警部は説明し、また番茶を啜る。

「まさか九州新幹線の開業一番列車、今朝の『つばめ３０号』に乗ってこのような事件を起こしたとはさすがに考えにくいですが……いかがですか？」

じゃあ、昨夜の特急の車内や熊本駅にいたオタクっぽい人たちはみんな、この新幹線とかを目当てに……？

いや、待て待て待て。僕はこんなアリバイトリック使ってないぞ。瑞穂を呼ぼう、彼女なら僕が今朝ずっとこの家にいたことを証言してくれ……いや、そうだ、彼女はいないんだ。心臓が爆発しそうな勢いで脈打つ。

「このように、あなたにはアリバイがありません。動機は先程話したように遺産があります。詳細に調べたらもっと出てくるかもしれませんが。弟さんは女癖が悪かったそうですし、その辺を叩けば何かあるかもしれませんね」

黒松警部が紡ぐ言葉に、段々視界がぐらついてきた。鮎川哲也の小説でも、最後に犯人はこんな感覚を味わっていたのかもしれない。そういえばあの小説、最後にはどの犯人もアリバイを見破られていたっけ……。

輝。お前、新幹線を建てていたって言ってたよな？　これって、俺への罠だったのか？

返事などあるはずがない。あったとすれば、それは窓の向こうを駆け抜けて行く新幹線の警笛だけだった。

「碓氷新平さん、署までご同行願えますか」

斜陽が黒松警部の眼鏡を照らした。

＊　＊
＊　＊

「それで……お父さんはどうなったの？」

私は少し語り疲れて俯いた。

「今話した最初の警察の推理は的外れだったけれど、あの人が人を殺した事実は変わらない。警察も署での聞き込みの後、更なる捜査で色々と新たな証拠を見つけたの。結局それが決め手になって正式に逮捕された」

「証拠？」

私は記憶の海を進む。

「私の叔父……輝さんはビールを飲んでいたでしょう？詳細な司法解剖の結果、当然体内からアルコールは検出された。ほとんど分解されていない状態で。つまり、ビールを飲んですぐに殺されたってことになる。でも、朝っぱらからアルコールを口にするかしら？」

「仕事が無かったって話だし、可能性はあると思うけどなぁ」

「まあ、その可能性は否定しないけど……もっとはっきりした矛盾があったのよ。部屋に転がっていたビールの空き缶の中身は乾ききっていた。開封してからだいぶ時間が経ったか、部屋が相当乾燥、あるいは高温でないとこうはならない。空き缶の中を洗うことはできても拭くことはできないから、自然乾燥してこうなったと考えるのが妥当。じゃあ、おかしいのは死体の様子か部屋の様子になる」

礼士さんはうんうんと頷いた。過去に何度か謎を解いてきた身だ。これくらい、お茶の子さいさいだろう。

「体内から検出されたアルコール分の量は、缶ビールに含まれているものよりも少なかった。でも缶ビールはカ

ラッポで、洗われた痕跡もない。まさか飲みかけを叔父が途中で捨てるとは考えにくいし、叔父以外の誰かが飲んだか、それとも取っ組み合いの拍子でまけたか……」
「ん？　瑞穂さん、まけた、って何？」
「え？　まけた、って言わない？」
「聞いたことないけれどなぁ……どこの言葉？　こぼれた、みたいな感じ？」
「え、うん……標準語にするとそんな感じかな？　もっと派手なニュアンスがしたりもするけれど。撒く、だったら言わない？　たぶんあれが変化した『まける』。どこの言葉だろう……お母さん、あ、義理の方のお母さんね、彼女がよく言っていたけれど……高知の言葉なのかしら？」
　私は少し考えたが、頭を振った。話を戻そう。
「とにかく、警察はそのビールについて疑問を抱いたのよ。チャーハンも同じ。胃の中に入っていたチャーハンの量はわずかだったけど、冷凍チャーハンの袋はだいたい半分が空になっていたのよ。叔父が食べた量と一致しないの。叔父が床にまけたぶんを加えて一致するなら矛盾しないんだけど、それを加えても足りなかった。そうなると、何らかの理由で犯人が処分したって考えるしかないでしょ？　あるいは犯人も一緒にチャーハンを食べたか」
「でも、冷凍チャーハンでしょ？　食べかけを冷凍庫で保管していただけだったんじゃないのかな？」
「叔父さんが殺される直前にスーパーで買ったものだったの。レシートも部屋から発見されたから確かよ」
「そうか……空き巣や強盗がわざわざ掃除するはずもないし、その点でも犯人は空き巣の犯行に見せかけたかったって分かるね。床にまけたチャーハンには犯人の食べかけのものもあって、そこから犯人自身の唾液なんかが検出されるのを恐れたのかな？」
　勘の鋭い人だ。私は頷き、話を進める。
「でも、もっとおかしな点があった。叔父が着ていた服の跡が何だかおかしかったのよ。床を引きずられたかのように背中がめくれていたの」
「背中がめくれていた？」
　礼士さんがオウム返しをする。
「叔父は仰向けのままこたつに入っている状態で発見されたの。誰かが床を引きずって衣服が乱れたとしても、こたつの中では分からないでしょう？　だから犯人も気付かなかったんじゃないかって警察は考えたのよ。仮に犯人がわざと死体をこたつの中に入れたとしたら、その狙いは死体を暖めて死亡推定時刻をずらすことくらいしか考えられない」
　礼士さんは少し考えこむ。普段は優しいはずの目つきは、確かに今も優しいのだが鋭くなっている。
「でもさ、叔父さんは自分でこたつに入ったんじゃない？　自分で仰向けになってこたつに入っても背中はめくれるよ」
「だいぶ派手にめくれていたの。それに、床にはカーペットがあるわけでもなかったから、背中のめくれを放置していたら直に背中と硬い床が接することになる。そのままじゃ気持ち悪いからめくれを直すと思うわ」
　礼士さんは納得した表情をした。
「それで死亡推定時刻を洗い直したら……瑞穂さんのお父さんが本来使った急ごしらえのアリバイトリックが浮かんできたのか」
　私は俯きつつ頷いた。探偵に追い詰められているかのような息苦しさを味わっていた。私が殺したわけではないのに。
「何と言うか……大変だったんだね。申し訳ないけれど、今はこれくらいしかかける言葉が思いつかない」
　私は今度は首を横に振る。ここまで真剣に話を聞いてくれた人は……私を想ってくれた人は初めてだ。
「その時の捜査を担当したのが、以前の新幹線が乗っ取られた事件でも担当していた八雲さんよ。東京駅で八雲警部に会った時、太っていて姿形が変わっていたからにわかには思い出せなかったけれど……まさかと思ったわ」
「八雲刑事って……八雲ってそうそうある苗字じゃないからまさかとは思ったけれど……やっぱり」
　礼士さんも驚いている。そういえば、この人は前に『人の出会いってのは、往々にして奇妙なものですよ』って言っていた気がする。どこだろう。多分トワイライトエクスプレスの車中だ。
「取り調べの時に本来使ったトリックも何もかも自白して、有罪になったわ。今は刑務所にはいないけれど」
「出所か……でも、9年前の事件だろ？　殺人にしては刑期が短くない？　後付けとはいえ計画殺人だし……」
　礼士さんは不思議そうな顔をしたが、私の顔を見てしまったという表情をした。
「……ごめん、さすがに言い過ぎた。父親を今みたいにボロクソに言われたら怒るよね……」
「別にいいのよ……事実だし」
　私の表情が浮かない理由はそこではない。
「死んだの」
「し……！？」
　私の言葉に度肝を抜かれたようだ。
「牢屋の中でね……脳梗塞だったって。看守が気付いて見つけた時は冷たくなっていたそうよ。本当かどうかは

分からないけど、あの人は体が弱かったから……変なものよね、弟の死体は十分に暖まってから発見されたのに、自分の死体は冷たくなってから発見されたなんて」
礼士さんは無言だ。何て言おうか言葉を探しているようだ。垂れ目の先を辿ると空虚を捉えている。
「結局あの男は、何一つ変わらなかったのよ。私が生まれたのも、弟を殺したのも……後悔したって取返しのつかないことなのに」
もぞもぞと体を動かし、恋人の暖かな腕から抜け出す。
「礼士さん」
私は恋人を見据える。
「あなた、本当に私みたいな女でいいの？　……私を好きになって、後悔していないの？」
「うん」
礼士さんは即答した。その答えに戸惑いが半分、安堵が半分だ。
「誰が何と言おうと、瑞穂さんは瑞穂さんだ。僕の大事な人だ」
そう言い、私を安心させるように微笑む。
「でも、今の話と、その……その体の傷はどう関係するの？」
私は話そうかどうしようか迷った。でも礼士さんは疑問にはしつこい人だ。今まで、何度もその様を見せつけられてきた。私が相手だとしても、ここを素直に引き下がるとは思えない。それに……それに、私は決めたんだ。この人の優しさに賭けるって。この人の優しさを信じるって。
「……私は一番親しい身寄りと離れ離れになって、住んでいた出水も離れることにしたの。近所の目もあったし……別の土地で暮らすことにしたの。高校も辞めざるを得なかった。親戚の所をたらい回しにされて、最後に辿り着いたのは……私の生みの母親、会津さんとその新しい夫、つまり私からしたら血の繋がりが無い男の所ね」
「……それで？」
私の言葉は止まらない。止めようがない。
「会津さんは私を暖かく迎え入れてくれたけれど、それは最初だけ。一緒に暮らしていた夫……私は叔父さんって呼んでいたけれど、その人がどうしようもないろくでなしだったの。会津さんは私を家庭に引き入れて、さっさと自分だけ出て行ってしまった。私は身代わりになったのよ。私に残されたのは、ろくでなしとボロアパートだけ。あの石巻の。……礼士さん、あなたが住んでいたあのアパートよ」
礼士さんの垂れ目が見開かれ、顔にゆっくりと驚愕が広がる。
「じゃあ……じゃあ、その傷って……」
私は冷淡を装って頷く。
「ろくでなしの遺産よ」

＊　＊

結局、その夜は礼士さんに抱かれずに終わった。彼は私の話が終わると、私をおずおずと抱きしめ直した。そして優しく背中を撫でるだけだった。私は礼士さんの背中に腕を回した。彼の厚い胸板を枕に、少し眠った。
目を覚ましたのは夜空が白み始めた頃だ。礼士さんは私を腕に抱いたまま眠っている。起こさないようにそっと抜け出した私はバスローブを脱ぎ、畳んだ下着を取りに行く。結局はシャワーを浴びて、話をしただけだった。皺のほとんどないベッドを見て従業員は首をかしげるだろう。
「ねえ、お父さん……？」
私は冷え切った独り言を放つ。
「……血は争えないのかしらね」
しばらくした後。私は礼士さんを起こし、ラブホを後にした。出口の近く、暗闇の隅で何かストロボみたいなものが光ったような気がしたが、何だったんだろう。

＊　＊

帰り道をゆっくりと朝焼けが照らしていく。気怠く静まり返った色街が、徐々に薄桃色に染まっていく。
横を歩く礼士さんが言った。
「気付いてあげられなかったのが……悔しいよ」
「え？」
「……同じアパートだったのに、そこでそんなに酷い目に遭っていたなんて。全く気付かなかった」
……そんな感じのことを言うと何となく予想はついていた。だって、礼士さんは優しい人だから。でも、この優しさにもたれていられるのもそう長くはないのだろう。
「それは違うわ、礼士さん」
垂れ目の中、石炭のように明るく黒い瞳が私を見た。吊り気味の私の目が反射している。
「トワイライトエクスプレスで私に言ったこと、覚えてる？　『自分が悪くないことまで謝ってると、しんどくなりますよ。誰のためにもなりません』って言ってたでしょ？　私ね、あの言葉で少し楽になれたの。……今の礼士さんにも同じことを言わせてもらうわ」
礼士さんは少し呆気にとられた後、くすくすと笑い出した。
「……そうだったね」
私は恋人の手を握った。暖かい。重たくなった空気を変えるべく、からかう。
「礼士さんはこのまま帰っちゃっていいの？　せっかく

私とエッチできるチャンスだったのに」
「あはは、ちょっと勿体無かったかもね。……瑞穂さん、きれいだから。スタイルも僕の好みだし」
……この人、私の予想しないところで一撃をぶっこんでくるから油断ならない。
「それに……あのまま押し倒すなんて、できないよ」
「えっ？」
「……二人一緒に楽しみたいからね、ああいうことは」
私の顔の赤みが薄明かりに溶ける。並んで横を歩く恋人も同じだろうか、よく見えない。握る手の力を強めたら、しっかりと握り返された。
礼士さんと一つになったのは、もう少し先のこと。
男の人に抱かれるのに恐怖を覚えなかったのは、男の人に抱かれるのに乱暴にされなかったのは、初めてだった。

＊　＊

うらぶれた喫茶店で、俺は担当者を待っていた。ゆるゆるな太鼓腹を抱えた興信所の担当者は少し遅れてやって来た。
「……もっと情報が欲しい。この女についても、一緒にいる男についても」
提示された写真には、ラブホから出てくる女。横に大男を連れている。数日前に尾行した収穫だという。
担当者は、他の興信所とも情報を交換することを提案した。出費は痛いが、どうせ元は取れる。あの女からぶん取ればいい。
あの女の締まり具合、悲鳴、散々に穢された時の表情、それを思い出す度に俺の腰が快感で疼く。
「次の報告は冬になるでしょう」
担当者は窓の外を見ながら言った。秋の風がざわざわと木々を揺らし、枯葉を散らしていた。

〈第六話につづく〉

＊次回『霧降荘の殺人（仮題）』は三文文集２０２０年秋号に掲載予定です。ご期待下さい。